

内山完造研究会報告②

内山完造『花甲録』読み合わせ会の記録 (2)

菊池敏夫 (神奈川大学人文学研究所客員研究員)

本稿は、内山完造『花甲録』のうち、1931年から1945年分の読み合わせ会の簡単な記録である。

1931年。年表(三省堂『最新日本歴史年表(増訂版)』から抜粋)には3月から5月にかけて栃木県黒磯町大火を初めいくつもの国内災害に関する事項に続いて、9月18日には満洲事変が記録されている。年表の不十分な点を内山自身が補った「特記事項」には、武漢の長江大水害、1929年の世界恐慌の余波である銀相場の暴落や上海金融市場の大混乱、そして満洲事変に対する反日運動やそれに伴う上海在華紡の全面閉鎖があげられている。

長江の大洪水は漢口日本租界を水没させるほどであったのに日本人の関心が薄いため、内山は朝日新聞の尾崎秀実(?)視察と救援を要請し、上海日報には慰問品の募集をはたらきかけた。日本人基督教教会も慰問使を派遣した。

さて詳しい時期は不明だが、以前から内山は北四川路に日語学会という日本語学校(鄭伯奇校長)を経営していて、この頃までには5つの教室を使って二部授業をするほどの盛況であった。ところが満洲事変の発生によって日語学会の学生は激減し、学校も休校・廃校を余儀なくされた。またこの頃、日語学会において中国初の木刻講習会が一八芸社の主催で開催された。講師は内山嘉吉、通訳は魯迅が担当した。

この他に「上海童話協会」の発足があげられる。上海の日本人家庭では子供雑誌が多く読まれたものの、耳を通して子供の自然な感情を育てる教育は不十分であったので、キリスト教の日曜学校関係者との間で協議し、上海童話協会を設立し、童話の会を開いた。日曜学校の人々は話が非常に上手で、この興行は大当たり、平素でも500人以上、大会になると2000人くらいの母子が集まった。ここでは戦争に関する話は一つもなかったという。日語学会といい上海童話協会といい、内山は商業的なものであれ、文化的なものであれ、諸条件を整えば速やかに事業化、組織化していたことが判る。

1932年。上海では1月28日に上海事変が発生し、4月29日の天長節には新公園での手榴弾事件があり、いよいよきな臭い時代となる。この年の記述は長く、都合10頁にも及ぶ。

上海事変をめぐる逸話は数知れない。「上海は日本の武力を知らないので吾々日本人を馬鹿にしたり、排日騒ぎなどをやるので、一度日本の武力を知らさねば駄目である」という日清戦争当時そのままの中国観を弄する日本軍によって事変は引き起こされた。それが居留日本人の生命財産の保護のためでないのは軍が軍・領事館関係の家族を一番先に本国へ引き上げさせ、居留民は勝手にせよといった姿勢であったことから明瞭であり、やはり「上海事件はわざわざの発生で」あった。これは第1次世界大戦で大きな人的、物的被害を被った世界各国によるパリ講和会議の開催(1919年)、国際連盟の創設(1920年)、不戦条約の締結(1928年)など、和平を模索する動きに逆行して、日本軍が旧態依然の帝国主義的動きをしたことを批判したものと思われる。内山は事変に際して軍や居留民の猜疑のあるなかで極めて活発に行動した。多くの中国人が陸戦隊や自警団によって連行される列に魯迅の弟である周建人の家族を見つけ、釈放してもらったこともあった。内山の保証で釈放された人々は多数に上った。また内山

書店の電話だけが通じていたので、朝日、毎日、共同通信もみな店の電話を使った。店は記者や歩哨、近所の人々にも炊き出しを行った。また魯迅一家を無事にイギリス租界の支店に避難させることもできた。このようであったから、ラジオや新聞には内山書店の名が何度も登場し、新聞社発行の地図にも店の名前が特記されるほどで、内山書店の知名度はいやがうえにも高まったという。

帰国中、各方面で行った内山の中国漫談は従来の「支那通」の話とはおよそかけ離れた中国人の生活を中心とするものであったので、注目を浴びた。たとえば特殊社会組織である幫（パン）の存在や、商売の世界において多く買うと割高になり、少なく買うと割安になること、考え方において日本人が単一的である（内山のいう「一辺倒」）のに対して中国人は二本立てである（同「両辺倒」）ことなどである。内山が当時の「支那通」をどのようにイメージしていたかについては話題になったわけではないけれども、私はちょっと気になっている。

上海事変は3月3日イギリス総領事の仲裁でようやく平和になった。居留民大会に踊った虹口人たちは不満たらたらであったものの、内山は「日本外交始まって以来の上出来であると思うた」と評した。

第2次上海事変のときも含めて、中国人非戦闘員の戦闘区域からの引揚げに天主教の人々が尽力し、ジャッキー師に大陸賞が贈られたのは重要なことであった。これに関連して、文明国人は国境、民族を超えて行動できるのに対して、この時代の日本人にはそれが難しく、「何でも帰納点は日本帝国と云うことが終極になっている」と内山は批判している。大陸賞については未詳である。

第2回版画展覧会を老靶子（ローボツ）路のJYMCA（日本人基督教青年会）で開催するも、低調に終わる。

1933年。魯迅の木刻運動について中国の文化運動の中で価値の高いものの1つであると評している。その理由として、それがソ連やドイツの木刻の普及を進める一方で、衰退しつつある中国伝統の木刻の保存にも努めていることの2点を挙げている。アジアにおける近代文化の創成を求める際の基本線の1つといえようか。また上海など中国の近代都市における伝統文化の転生・発展に関わる議論ともいえる。魯迅の傍らで木刻展を3回も開いたこと、中国の木刻普及のために木刻刀等の販売をしたこと等も「愉快なこと」であったという。

この時期の日本軍部の動きについて、彼らは当初満洲事変だけで収拾できると考えていたらしいが、そもそも長城を越えたのが間違いであり、黄河以南へ進むに至っては彼らの傲慢に他ならない、とその危険性を内山は指摘した。

『現代中国の作家と作品』のなかの中国語に訳された日本文学の目録によってその出版元を見ると39書店、内山書店ができから後に、または同時にできた店が21ある。その訳書は合計約830種、そのうち訳者を知っているケースが330あまりある。これらの種本は大部分が内山書店の供給したもので、とくに左翼本330種はそうである。内山書店を介した日本文化の中国人への影響は相当なものであった。訳者には、魯迅、郭沫若、田漢、夏丐尊、謝六逸、沈端先など極めて多数に及んだ。

世界木刻画展覧会と名称を変えて、第3回の版画展覧会を開き、大成功を収めた。

1934年。国民政府の新生活運動について注目すべき記述がある。すなわち、日本人旅行者はみな、国民政府の新生活運動は徹底している、南京で歩きたばこをして巡査から注意された、と感心する。しかし巡査はそれ位のことよりできない、それも南京だけ位である。上海では新生活運動など問題にする者はいない、という。上海史研究や国民党史研究にとって重要な指摘である。

日本内地の大企業、銀行の人々からすると、上海支店勤務は出世の登竜門であった。上海のあと、ロンドン、ニューヨーク勤務等を経て本社勤務へと昇進していく、これがオーソドックスな出世コースであった。しかし、それとは別に、上海支店詰めには大きな魅力があった。一つは非常に安価で上等の文化的生活ができた点、今一つは租界における治外法権地域の生活が束縛のない自由なものであった点であった。

上海の看板・屋号の話。辞書を引いただけでは直ちには判らないものがあるので、たいへん参考になる。「質」と「押」=ともに小さい質屋。「当」=大きい質屋。流れ期限も18か月と長い。「典」=一番大きい質屋。北方に多く上海には少ない。「当」も「典」も店の壁面に大きな文字で書いてあって、遠くからでも見てすぐに判る。「官醬園」=醬油屋。「官塩」=塩屋。官許専売の店。「牛奶棚」=牛乳屋。「稻香村」=お菓子屋。「陸稿荐」=肉屋。「盆湯」=風呂屋。「客棧」=宿屋。「仕官行台」=古い宿屋。「飯店」「酒店」=新しいホテル。「洋行」は外国商社。「錢莊」は古い銀行・両替屋。「銀樓」=金銀細工店。「菜館」=料理屋。「飯館」=飯屋。「鐘錶行」=時計屋。「書局」「書社」「図書館」「印書館」=いずれも本屋を指す。「綢緞舖」=呉服屋。中国の屋号には「号」「堂」の付くものが多い。「永泰号」「泰和号」など。「堂」は薬屋に多く「天吉堂」「慶余堂」など。使われる文字はどれも福祿寿に縁がある。屋号の上に小さく「合記」「協記」「洽記」などと書いてあるのは2人、3人、数人、数十人とかの合資を表わしている。

大火事とその経済損失に言及。1925年にも、水災、火災の多発によって生産力が停止する問題に触れ、それを放置したままの戦争遂行に疑問を呈していたけれども、10年後の1934年の項でも同様の指摘をして「嗚呼」と嘆いている。

1935年。三省堂『最新日本歴史年表(増訂版)』には記載がないために、内山が独自に重要事項を書き加えた「特記事項」欄には次のような記述がある。2月、上海に金融恐慌起こる。9月、イギリスから経済使節としてリース・ロスが来日。11月、幣制改革を断行す。中央政府、銀の国有を断行し現銀の強制収容を断行す。従来の兌換紙幣はこの時から不換紙幣となる。中央銀行を始め全中国の銀行が発行している紙幣は全部不換紙幣となるとともに中国人は一般に従来大洋とか洋銀とか洋とか金額の上に書く文字が今日からは法幣とか国幣とか鈔票と書くようになった。ちなみにこの幣制改革はのちの長期インフレを引き起こす原点となった。

内山の最初の随筆集『生ける支那の姿』が東京学芸書院から出版された。序文は魯迅が認めている。内山は「その時の私の嬉しさは天に昇る思いであった」と回顧している。ずっと後のエピソード。ある日1人の中国人客が来店し、この本を10冊購入したうえで、この本は是非日本人に読んで欲しいから10冊とも日本人に差し上げてほしいとやってきたので、大学の図書館に寄贈した。のち内山が東北大学に行ったとき、そのときの寄贈本の1冊を見せられたという。東北大学の寄贈本の存在は一昨年当研究会の大里浩秋先生によって確認された。

1936年。年表の8月、ベルリンオリンピック水泳女子平泳ぎ「我選手前畑秀子第一位となる」と並んでマラソン「我選手孫基禎第一着となる」とある。

10月19日に魯迅が死去した。魯迅の死は全中国を動かした。中央公論社『支那問題辞典』は文学思潮欄でそれを大きく扱っているものの、文化史欄には何も載っていない。日本人の魯迅理解は文学者魯迅に止まり、全中国人が脳裏に烙印している魯迅とは異なる、と内山は批判した。中国人魯迅の前途は無限大であり、その喪失が重大であったのである。すなわち「宜べなる哉、全中国の青年男女が泣いたのは文学者魯迅に泣いたのではない。人間魯迅の死を泣いたのである」と。

中国に対する医学、医術に貢献する同仁会の主催で東京の有名医療器械店7軒が上海で見本市を開いた。内山が日本医療器械の販売方法の問題点について指摘し、代理店になることを申し出ると早速に話がまとまり、新たに開店した東店の2階全部を医器の陳列所に造った。内山書店の新発展であった。素早い事業化である。

最後に、嘉吉氏の所有していた『魯迅先生紀念集』から「魯迅先生逝世経過略記」を引用している。

1937年。8月に第2次上海事変が発生。蒋介石は「只怕蚕食 不怕鯨吞」(かじりとりで来るなら恐ろしいけれども、丸呑みで来るなら恐ろしくはない)と言ったというけれども、日本は決して丸呑みには出ないだろう、戦争は北方に限られ、決して中南方には拡大しないと内山は考えていた。しかしそれ

が全く見当違いであったから内山の面子は丸潰れである。「内山完造日本人を知らず」と反省している。

11月15日、北四川路方面の商人に復帰命令がでて、内山書店も営業を再開した。日本堂、至誠堂などはさらなる発展の方針をとったけれども、内山書店は一切の新発展を禁じ、現状維持を図った。平涼路マーケット近くの米屋で米奪いの騒動を目にする。16日、満鉄埠頭から楽洋丸に乗船し大阪へ。在華紡同業会堤氏から1500人の乗客の船内での世話係を頼まれ、それも首尾よく終えた。大阪に着くと上海紡織関係の船賃を民団の係の人物に渡したところが、のち、この船賃の所在を巡ってごたごたがあり、約3年の歳月を経て決着するということがあった。船賃は民団の金庫に保管されていた。下船の後、内山夫婦は京都の小倉村で生活した。夫人は心臓弁膜症をわずらっていた。

1938年。日本内地の講演に東奔西走する。満鉄福祉課から2月10日～3月14日までの間で中国漫談をやってほしいという要請があり、安東、奉天、新京、哈爾浜、齊齊哈爾、北安、哈爾濱、牡丹江、図們、吉林、新京、奉天、錦県、承德、奉天、撫順、遼陽、鞍山、大連と回った。「奉天ではただ座談会であって、千田とか衛藤とか石原とか云う満洲きっての猛者が質問に立ったのでヒヤヒヤものであったが非常に愉快であった」とある。哈爾浜、新京での評判も高く、数回にわたる講演のほか、小学生への童話もやられた。奉天では全満放送を2回行った。

大阪毎日、朝日はともに上海での販売は呉淞路の至誠堂を介してやっていたけれども、両者とも至誠堂に対する多額の貸付が焦付いたので、新たな代理店を求めているところ、内山書店雑誌部主人の長谷川に話が回ってきた。その際、契約書のサインはやはり内山でなければ困るということになったけれども、かつて至誠堂の出光氏がわらじばきで自ら配達して歩いていたことを知っている内山は、至誠堂から朝日の販売権を抜き取るようなことはできないとして断った。

この年の秋、夫人が小倉は寒くていけないというので、長崎に借家した。遊んでいるより本屋をするのがよいと、年末には中国図書専門の内山書店長崎店を開いた。長崎の最初の知人は高橋内科の高橋喜代志先生、長崎市議で長崎民友新聞社に關係のあった田中丈平氏であった。3人集まれば文殊の知恵で、「中国語講習会」をつくり、中国語とともに中国人の生活についても学んでもらうことにした。これは数年間続いた。

この頃、内山は私の早起きと原稿書きは一つの病ということができると述べている。

1939年。この年の記録の前半部はどうやら「嘘」(真実を伝えないこと、求めないこと)が重要なテーマとなっているようである。ノモンハンで日ソ軍隊が衝突し日本軍2個師団全滅という噂が流れた。ソ連軍の火焰砲や大型坦克の情報はなかったので、日本の戦術はまったく見当外れであったという。中日戦争、外蒙ソ連戦で、日本軍の敵機撃墜数は何十機、百何十機というような威勢のいい報告があったけれども、飛行場には上空から見ると本物に見える飛行機の絵がたくさん描いてあったので、それをドンドン「爆撃」したということらしく、報告も誇張されたものであったという。また戦時の「間に合わせ生活」に慣れると、人間まで「間に合わせ人間」になる。初めに嘘を言えばそれは最後まで続くことになるという次第である。

東京堂は上海の内山書店に期待しているのに、内山は一向に発展しないということで、話し合いがもたれた。他の書店は南京、漢口に支店を出し活躍しているのに内山だけが少しも動かない。内山は、この戦争の前途には少しも光明を見いだせない、軍の拡大に便乗した発展には興味がない、という姿勢であった。その後東京堂はしびれを切らし漢口に支店を出したものの、成績が上がらず、間もなく撤退した。内山書店は戦争がらみの焦付きなどなく、上海の日本人書店が十数軒に増えた後も、単行本の扱いは華中の日本人書店全体の取り扱い数をはるかに上回った。

この頃、日本橋茅場町の吉川病院で脱腸の手術を行った。

パブリック公園に中国人の入場が許されることになった経緯が面白い。中国人の入場許可といってもインテリはいざ知らず、苦力の入場は都合が悪い。苦力を閉め出す方法は、公園に1回入場するたびに

2角の料金を取ることであった。苦力は日当5角であった。そしてこれまで無料であった外国人には1年1元のパスを売ることにした。この方法を実行してみたら誰も文句を言わなかった。イギリス人は賢く、中国人と相撲できるのは彼らであると評している。

1940年。1月、三条市の稲村隆一氏の招きがあり京都から北陸経由で雪の三条を訪問した。三条には洋食器製造で中国に進出したいという希望があり、金物製造家に中国漫談を話してほしいということであった。「私の話は例によって例の如くお粥の塊のような、河原の小石を並べたような話」であったというが、情ないことに、一体どういう喩えなのか私には皆目見当がつかないでいる。

3月に改造社から『上海夜話』が出るようになった。『上海漫語』が好評で自信を深め、『大陸』『改造』などに精力的に漫談を書いた。『中央公論』には主筆小森田の「東京だより」、村上知行の「北京だより」と並んで内山が「上海だより」を書いた。

楊建平との対談で中日の和平工作にローマ法皇の出馬を模索することで一致を見た。そんなある日、華中電気通信社長の福田耕氏、汪精衛政権顧問の噂のある石渡氏、各路聯合会長の林雄吉氏との座談のなかで中日問題の打開に話が及び、ローマ法皇の出馬を提案すると石渡氏が同調してきた。これは国内にも伝えておくのがよいと考え、上京の折、朝日新聞の太田卯之助先生に話すと「絶好の妙案」と賛成してくれた。しかしその他の所では受けが悪く、この話はボツになった。

南京に新国民政府が成立した。抗戦する重慶の国民政府から、両巨頭の一人である汪精衛が脱落して逃げ出す。その汪精衛が抗戦とは反対の和平政策を採って敵である日本の陣営に飛び込んでくる。中国は2つに分かれて「空」になった。この空が中国の経験の力であり、無限の力をもつのである。日本の敗戦によって和平政策の南京が没落し、抗戦の重慶が空を充たしていく、という訳である。

1941年。12月8日、大東亜戦争勃発。内山書店は夜明け前に店を開ける。お茶を入れて漫談が始まる。日本軍の砲撃の話や真珠湾の話で持ちきりである。店は朝から満員で、情報を得ようという人々でごった返した。

『上海風語』が改造社から出版された。本にするということになると「支那」とするか「中国」とするかの問題が気になるけれども、これまで『上海漫語』『上海夜話』と「上海」でやってきたので、これが適当であると考えられるようになったという。『生ける支那の姿』はそのうち「中国」に直したいと述べている。

1942年。内山が各年冒頭の年表の作成で依拠した三省堂の『最新日本歴史年表（増訂版）』は1941年12月をもって終っている。1942～45年について年表は付いているけれども、これは内山の自作と思われる。内山が年表の不足を補うために設けた「特記事項」も1942年で終っている。

11月、第1回大東亜文学者大会があった。内山は周越全、播予且、陶元徳、柳雨生、関露など知らない名前があり、団長が周作人であったとし、興亜院文化部からこの大会への出席者を紹介してくれという話があったけれども、「名のある人で出席する人は一人もあるまい」と答えたという。なお、第1回の大東亜文学者大会の参加者については内山に記憶違いがある。上記のうち柳雨生は第1回、翌1943年に開かれた第2回ともに参加している。その他第1回に参加したのは播（潘）予且、周作人（「周化人」の間違いか）で、周越全（然）、陶元徳（元徳）、関露は第2回大会参加者である。なお、前後3回にわたって行われた大東亜文学者大会については、当研究会メンバーである松本和也著『太平洋戦争開戦後の文学場 思想戦／社会性／大東亜共栄圏』（神奈川大学出版会、2020年）が詳細な検証を行っている。

この間、ローマ法皇の出馬は軍部の圧迫で立ち消えとなった。大東亜戦争になってしまっただけで最早手遅れである。

日本占領下で、軍票に代わる紙幣として中央儲備銀行発行の儲備券が登場する。当初法幣2元を儲備券1元と交換したけれども、儲備券はインフレの一途をたどることになった。このインフレの話から話

題は1949～50年、つまり『花甲録』執筆当時の中国における人民元インフレに移り、共産党が苦戦している様子が描かれる。紙幣に対する不信が頂点に達し、勝利公債の額面も「物」で記載した。償還は額面記載の物で行い、利息も物で支払う。「物本位制」と呼ばれる。話を儲備券に戻すと、紙幣の価値を維持するには、それを政府が税金や関税として受け入れ、流通範囲を拡大することが必要である。それを首尾よくできない汪政権のもとで儲備券は下落に次ぐ下落で、日本から金塊6000本を投入したものの、それはジュンともいわずに吸い込まれ、その結果見向きもされなくなった。

南京路のケリーウォッシュとアメリカンパブリッシングコンパニーの2社を内山書店で管理せよという命令がきたけれども、前者は日本出版配給株式会社（日配）に譲り、アメリカンの方だけ引き受けることとなった。また日本人書店の統合というので上海図書有限公司という統制会社をつくって、内山は内山書店という出版専門の会社と文具店とを経営した。

後半は、東京から上海までを朝鮮、北京、済南、南京というルートでたどった旅の記録である。京城では京城大学の辛島教授の配慮によって大学での漫談、王宮、博物館の見学、劇の鑑賞等を行い、谷川徹三、武者小路実篤との面識を得るなど貴重な体験をした。北京では清水安三氏の経営する病院で1泊した。3日の北京滞在の後、済南へ。済南は水の都。長江を渡り上海へ。面白い旅。

「上海の米さわぎ」という小見出しの付いたコラムでは日本軍の施設経営における実像の一端が紹介されている。上海の後方はすべて鉄条網で遮断され、3～4か所の通路があるだけである。上海への米の輸入は許可を要した。しかし自家用に自転車で運ぶくらいは認められた。すると租界への通路には自転車の長蛇の列ができた。自転車の利用が禁じられ、肩で担ぐのが許された。すると自転車以上に長いかつぎ行列ができた。かつぎが禁止され、1人3升までならオーケーとなった。すると3升の米袋を持った爺さま婆さまはじめありとあらゆる老若男女が街道に列をなした。通路の外には小屋がけの米屋が開店し、租界内にはあちこちに米市場ができていた。やがて米を持って租界に入ることは厳禁となった。

1943年。冒頭は自作年表のみ。『上海汗語』が上海で出版された。一にも南洋、二にも南洋、何でも南洋の時勢となった。中国での失敗が反省されていない。勝った、勝ったで深刻味がない、とある。

「往復四日」は海門旅行記。海門行きの船で密輸をする人々の様子とそれに関する感慨が述べられている。内山は1913年に大学目録の広告のために海門に来たことがあった。上海教会と繋がりのある人々の歓迎を受け、狼山見学も行った。

研究会では中国モザイクも話題になった。馬路の石路もあるが、とりわけ大邸宅や別荘の通路に見られるモザイクの路がそれである。2つずつの煉瓦路、屋根瓦を豎にいけ込んだ路、黒く丸い河原石の石畳路、朱泥の方形の陶器で畳んだ路、瑠璃の陶器の路などがあり、その所所に九竜、獅子、虎、牡丹、花瓶、種種の花模様が描かれている。中国式モザイクと呼ばれる。

「正月旅行」。2泊3日の杭州旅日記。次いで崑山半蘭園へ。園内の道全部が中国モザイクで飾り造られた華街である。

「南通行」。YMCAの旅行。南通は張謇と大生紡織会社の町。南通倶楽部で張謇兄弟が主催で、土地の紳士30人ばかりも総出で南通初の外国人歓迎会を開いてくれた。大宴会が実現した理由は謎である。南通学院医学部、農学部、師範学校、図書館、博物館、文廟などを自由に見学した。すべて張謇がらみの世界である。

「ラケット型旅行」。華中鉄道から蘇州—常州—蕪湖—合肥—九竜崗—蚌埠—浦鎮—南京の鉄道従業員に対する漫談の旅である。ルートがラケットの形に似ていることによるネーミングか。

1944年。自作年表に続いて、内山の解説文が置かれている。解説では5月のサイパン失陥やB29の本土爆撃に触れている。

6月、満洲経由で帰国。青島—大連—奉天—新京—大連—神戸着。神戸の造船所は休業状態で静まりかえり、3つのガスタンクはベシヤンコである。アメリカ義勇部隊フライングタイガースの攻撃による

ものか。神戸から岡山へ。岡山滞在中、北九州爆撃の報道があった。成都を基地とする米軍の B-29 によるものである。笠岡一姫路一京都で下車、小倉で 1 泊のち上京した。

9 月 2 日、上海に帰る。上海の書籍商も統合して会社をつくった。日配が上海に進出し、日本社の大橋常務と内山との談話は円満に了解したにもかかわらず、下役と上海の出張員とが少しも常務の考えを実行しない。上海の小売商人と日配とは対立的になり、融合することはなかった。上海の日配は小売りをして上海書籍会社と対立したのである。

改造社、中央公論社が閉鎖されたので、それらが持っている中国関係の紙型を買い取って現地出版することにした。学芸社の内山の紙型も届き、『上海漫語』『生ける支那の記録』『上海夜話』『上海風語』を現地出版した。どんどん現地出版を行い、どしどし漫語を書いた。日本へ送ることができないので、『大陸新報』に絶えず漫語を掲載した。

大晦日、夫人に発作が出て須藤医師に診てもらったが、そのまま病臥することになった。

興亜社から在留日本人の思想団体を造ることを囑託するという通知があった。しかし上海には総力報国会といって興亜同盟会と同じ綱領をもった団体があり、屋上屋を重ねることになるので断った。

1945 年。自作年表に続く解説文は 2 頁に及ぶ長さである。ポツダム宣言などを含み、年表の箇条書き風の書き方では表現できない内容となっている。

夫人みきさんの昇天。みきさんは信仰に導かれ内山と結婚し、ささやかな書店を始めると通関、荷ほどき、売り買いの記録まですべてのことをしてきた。お客を信じて貸し売りもやり、大きな信用を得た。しかしその奮闘があつてか、心臓を害し、第一線から退いた。そして一旦は京都市外、長崎に移り、高橋医師のお陰で元気を取り戻し、上海に戻った。しかし前年の大晦日に持病が再発し、家族の看病もむなしく、1 月 13 日、午前 9 時 42 分、神の御許に帰ったのである。

年初、内山は中国通の太田卯之助氏と会い、戦争を終わらせるために日本はソ連に仲裁を依頼すべきであるという点で考えが一致した。のち日本がソ連に仲裁を依頼したとか、しようとしたとかいうことが 7 月になって判った。しかしドイツ降伏後で、時間切れも甚だしかった。米英はヨーロッパの戦力をすべてアジアに移すことができ、ソ連も虎視眈々とアジアをうかがっていたわけである。

8 月 11 日。日本の無条件降伏が伝えられた。内山書店は出資社員には出資額に応じて買い入れてあった紙を送った。上海図書有限公司の株主に対しても出資額をすべて返還し、日本人、中国人の全店員に対して全財産と負債とを示し、他のものはすべて彼らの間で分けるよう指示した。のち中国側の決定に応じて 1 人 450 万元の解散費を支払った。

敗戦によって大使館事務所、総領事館、居留民団もことごとく解散した。10 万の居留民はただわいわいと騒ぐだけであった。日本人の指導者だった人も一番先に逃げた。中国側は松井太久郎中将に軍民の指導者を命じた。松井氏は軍を自分が担当し、民をまとめる自治会長の役を大使館事務所長・公使の土田豊氏に委嘱した。そして土田氏のもとに代表委員会を組織することになった。日僑管理処は湯恩伯將軍のもと王公漢局長で保甲制度が敷かれていた。全体は 5 つの区に分かれ、区長があった。代表委員には区長 5 人の他に 25 人を選出することとなり、内山は最高得点で当選した。上海 10 万人と奥地から集まってくる 10 数万人を受け入れ、帰国させることが最大の課題となった。宿舎、食糧の確保、子供たちの扱いや指導について全力をあげて世話をした。内山が「留用」されたか否か、その理由等について議論があつたが、結論は出ていない。

上海の日本人商店は全部閉鎖されたけれども、内山書店だけは 10 月 23 日まで各店が営業し、その後接収された。